

科学研究費助成事業（基盤研究（S））事後評価

課題番号	18H05234	研究期間	平成30(2018)年度～ 令和4(2022)年度
研究課題名	気球太陽望遠鏡による精密偏光観測：恒星大気における磁気エネルギー変換の現場に迫る	研究代表者 (所属・職) (令和6年3月現在)	勝川 行雄 (国立天文台・太陽観測科学プロジェクト・教授)

【令和6(2024)年度 事後評価結果】

評価		評価基準
	A+	期待以上の成果があった
	A	期待どおりの成果があった
○	A-	一部十分ではなかったが、概ね期待どおりの成果があった
	B	十分ではなかったが一応の成果があった
	C	期待された成果が上がらなかった
<p>(研究の概要)</p> <p>本研究は、恒星大気中での磁気エネルギー輸送と散逸のプロセスを理解することを目的に、大気球太陽望遠鏡 SUNRISE による高解像度で精密な偏光観測を実現する近赤外線偏光分光装置 SCIP の開発を行い、これを用いた観測と数値モデリングを利用した研究を推進するものである。</p>		
<p>(意見等)</p> <p>海外側の開発の遅れのため気球観測の実施が結果的に1年遅延した上、海外担当のゴンドラの不具合により観測データの取得を行うことができなかったために、本研究で当初予定されていた SUNRISE 観測データをもとにした研究は未実施となった。しかしながら、SCIP 開発と数値モデリング研究を期待どおり進め、太陽観測の国際プロジェクトにおいて日本のメンバーが主体的に貢献する基盤を確立したことは重要な進展である。気球観測の遅延期間を利用して入念な地上試験を行い、2024年の再フライトに向けて準備が整っていること、オンラインでの会議や装置試験の実施により新型コロナウイルス感染症の工程への影響を最小限に留める努力を行ったことも評価できる。</p>		